

解 說 編

## 解説 1

## I. 『和英語林集成』初版の「英和の部」について

飛田良文

## 1. ヘボンの業績

米国の宣教師ヘボン (James Curtis Hepburn) が、福音を伝えるため、夫人とともに日本にやってきたのは、日米通商条約がむすばれた翌年、1859年 (安政6) 10月18日のことであった。

ヘボンは、1813年3月13日にペンシルバニア州ミルトンの法律家の家に生まれ、1831年、16歳でプリンストン大学の3年に編入し、翌年の秋に卒業した。つづいて、ペンシルバニア大学で医学を専攻し、1836年、21歳で医学博士となった。そして、医科大学時代に長老教会の会員になり、外国伝道に志したのである。

1840年、クララ・M・リートと結婚、1841年から5カ年、中国の伝道につくしたが、夫人の病気で帰国、1846年から13年間、ニューヨークで眼科医を開業していた。しかし、日米通商条約締結の報に接すると、日本へ宣教師としてゆくことをみずから申しでて、1859年4月24日、サンチヨ・パンザ号でニューヨークを出帆、日本へむかったのである。

それから33年間、1892年 (明治25) 10月22日に横浜を出帆して帰国するまで、ヘボンは日本のために、医療事業、和英辞典の編集、聖書の翻訳、キリスト教教育、教会の建設などの多方面にわたって力を注いだ。なかでも、日本最初の和英辞典の編集は、日本人と英語とのむすびつきを密接にして、日本の近代化に大きく貢献した。

ヘボンが神奈川に上陸したころの日本では、キリスト教はまだ禁止されており、幕府はヘボンの住む成仏寺にスパイを送り、行動を監視し、家財道具いっさいを調べるという状況で、とても宣教をおこなえる環境ではなかった。そこでヘボンは、将来、日本での宣教活動が自由になったとき、宣教師の日本語学習を助け、また、聖書を日本語に翻訳するために、和英辞書をつくろうと思いたち、日本語の研究にとりかかった。それは、完成までに約8年間をついやした大仕事であった。7年目にあたる、1866年9月4日付けの書簡には、

日本語は西洋の諸国民にはまったく新しい言語でありましたし、われわれの手もとには、辞書も文法書もなかったので、最初から自分ですっかり研究しなければならなかったのです。とくにわたしは、このことに没頭しました。7年間、単語を収集し、それらを分類定義し、日本語の文法上の原則や慣用句になれるように努めることのほか、ほとんど何もいたしませんでした。それは、きわめてのろい、骨の折れる方法でありました。けれども、それをやり通して、はじめて辞書の形でこれを出版するにいたる曙光をみたのです (高谷道男編訳『ヘボン書簡集』)

岩波書店、1959年刊)。

と、当時の苦勞が記されている。

1867年、この辞書は『和英語林集成』という書名で出版された。しかし、当時の日本では、活版印刷ができなかったため、印刷は上海のPresbyterian Mission Pressに発注した。そのときヘボンに同行したのが岸田吟香で、この辞書の書名は、彼がヘボンの依頼でくふうした「和英詞林集成」をヘボンが一字修正してできたものである。

## 2. 和英語林集成「英和の部」の性格

『和英語林集成』は「和英の部」と「英和の部」からなっている。その「英和の部」は、初版では「索引 (AN INDEX; OR, JAPANESE EQUIVALENTS FOR THE MOST COMMON ENGLISH WORDS.)」と記されており、同義語集と呼んでよいものである。しかし、再版からは第二部 英和辞典 (PART SECOND. ENGLISH AND JAPANESE DICTIONARY, CONTAINING THE MOST IMPORTANT ENGLISH WORDS WITH NUMEROUS EXAMPLES.) となったため、和英・英和辞典と見なされているが、その本質は「和英の部」にあったと考えられる。しかし、「英和の部」の訳語（日本語）には、「和英の部」に見られない単語が多数含まれており、日本語研究、翻訳語研究、辞書史研究、文化史研究などには不可欠の文献となっている。そこで、初版の構成の中で、「英和の部」すなわち索引は、どのような目的で執筆され、どのような位置をしめるものか、序文と、ヘボンの書簡から考察してみよう。

序文 (PREFACE) のうち、初版の構成と内容を述べているのは、第三段落、There are over 20,000 Japanese words defined in the dictionary.から始まる。そして、最後の段落を除いた、誤植について述べたところまでが「和英の部」と「索引 (英和の部)」に共通する部分である。この部分を翻訳すると、およそ次のようになる。これは1867年5月上海でJ.C. Hepburnがその精魂をこめて書き記したものである。

この辞書には、意味を明確に定義した2万余の日本語が収録されている。この語数は、もしその複合語と死語をすべて含めたなら、かなり増えたにちがいない。ここに採録した2万余語は、そのほとんどが、私自身が読書の過程で集めたものと、日本人とのつきあいの中で耳にしたものとである。見出し語の大部分は漢語であり、主に書籍と書簡の中で用いられ、その意味用法はきわめて狭い。大部分の日常語彙は、和語であれ漢語であれ、できるかぎり用例によって説明するように努めた。その用例の一部は書籍から抜粋したものであるが、大部分は日常会話から採取したものである。

ただ、私は日常用いられている語彙に限定したので、この辞書を見栄えのしない本にしたかもしれない。しかし私は、学習者の目に、すべてのことばを一定の順序に配列して提供することを意図していた。そして、単語の意味をあますところなく記述してはいないかもしれ

ないけれども、できるかぎりそうしようと努力した。

本書をより完全にするために、私は、仮名と漢字の表記を見出しに加えた。仮名遣いは日本の最も権威あるものに従った。和語見出しに付けた漢字表記は、同義のものとして普通に用いられているものである。

また、単語のそれぞれに品詞を付けることも試みた。これは和語については、さほど困難ではなかったが、漢語については同一の語が名詞にも動詞にも形容詞にもなり、いろいろな用法を示すので、たいていの場合、不可能であった。

同義語の採用もまた有用と認められるだろう。この部分は第二部、すなわち索引において十分実現されている。

単語をローマ字化するにあたって苦勞したのは、それぞれを最も教養ある日本人が発音しているとおりに発音を示すことであった。そして、正書法については、わずかな相違はあっても、日本の言語学者によって一般に使用されているものに従った。

印刷は、多くの悪条件のもとに行われた。特に上海で入手できなかったアクセント記号のついた母音と大文字の不足は、不利な状況のもとで活字を製造しなければならない事態を生んだ。これが統一性を欠き不揃いが見られる原因である。

あらゆる努力にもかかわらず、少なからず誤植がみられる。しかし、その大部分はささいなものであり、少し注意すれば、読者は自分で誤植を修正できるだろう。そこで正誤表は作成しなかった。(Preface)

ヘボンは、序の中で、このように『和英語林集成』全体を紹介している。

ここに刊行する『和英語林集成 初版 訳語総索引』の本編にあたる「英和の部」すなわち「索引」の影印は、「和英の部」の同義語の補足として執筆されたことが明らかである。

## 3. 「英和の部」の成立について

そこで、ヘボンの手紙の中から、辞書及び同義語に関する部分を引用してみよう。

日本についてのわたしの予想は決して明るくありません——外国人が人民と接触することは禁じられており、キリスト教は、特に人間の邪悪なものとして排撃されねばならぬと考えられています。人民にキリスト教を教えることは許されておりません。日本文や漢文で書かれたキリスト教の書物は注意深く排除されております。現在、長崎には二人の監督教会の宣教師がおりますが、いずれも邪魔されております。わたしは医者として静かに行き、その職業をいとなみ、漸次、わたしの途をきり拓いてゆきましょう。——しばらくは語学の習得につとめます——辞典を編さんし——他の人々に有用な働きをいたしましょう。

(1859年8月31日・高谷道男編訳『ヘボンの手紙』有隣堂42ペ)

これは来日する直前、上海から弟へ送った手紙の一部である。ヘボンは、はじめから日本語辞

書の編纂を志しており、当時の社会情勢がよく示されている。

次は神奈川に居をかまえて、同じく弟への手紙である。

日本語は中国語よりはるかにむずかしいと思います。発音するのに苦労する一つの音がある。dとrとの中間の発音です。しかしわたしはできますがちょっと苦労します。この二つはおたがいに変化します。rの音の方に近いようです。困難は語の構成にあります。ムード、テンス、ケースなどに適する語の変化に存するのです。それから上流階級の使う言葉があり、目上の者に話す流儀と目下の者に語りかける言葉づかいが異なっています。たとえば、「すわりなさい」という単純な言葉「かけ」がおえらがたには「おかけなさいませ」となる。日本語には非常に多くの中国語が使われているが、しかし、それが日本化しています。日本の書物は和漢まじりの文体です。平俗な文学には日本語だけしか用いられていない。わたしの知っているわずかばかりの知識から判断して、日本語は中国語より遙かにすぐれている。語数が多いこと、非常に融通がきく、複合的な語が多い等々。もっと日本語を知った上で、詳細に書き送らしましょう。わたしは正規に日本語を研究しております。最初のシラブルの最初の語を説明し、順序正しくおくとって四十七シラブルのうち十三シラブルまでできました。

こうして辞典の編さんをしております。 (1860年5月5日・同『ヘボンの手紙』64ペ)

ここで注目されるのは、「上流階級の使う言葉があり、目上の者に話す流儀と目下の者に語りかける言葉づかいが異なっています」と記していることである。日本語のローマ字化に苦労したのは、このような土農工商による身分差を十分に理解し、武士階級の発音を示そうとしたからである。そして、この実際を示したものがS. R. BrownのColloquial Japaneseの会話文であることは、いうまでもない。

また「わたしは正規に日本語を研究しております」という記述で、47シラブルのうち13シラブルまで、編纂したと述べている。当時のことであるから「いろは順」であろうから「いろはにほへとちりぬるをわ」まで出来たということであろうか。それから6年目。

辞典の編集は着々と進捗しています。それは大きい働きです。わたしを助ける既刊の参考書もなく、開拓的な仕事ですから。わたしの考えとしては立派な著作になると思います。最初に日本語をローマ字で書き、ついで、同じ意味を漢字で横書きにします。漢字は日本では中国とほとんど同じように用いられています。会話の一部——定義は、意義と用法を説明するために日常会話の文かまたは書物から引用して、最後に同義語を書きました。同義語はご承知のように広範囲にわたるもので、かなり労力と研究を要します。これを印刷に付するため、いま最後の原稿を書き改めて、やっと終わりのつづりまで書きおえました。すなわちフールズ・キャップ判約600ページで、全体の半分以上書きおえたのです。いつ、どうして出版するか、きまっていません。わたしは貧しくて、とても自費でそれを出版することはできないし、伝道教会も、それを企画しないでしょう。ここに出張している商人たちは、みな破産しそうな状態です。

(1865年8月10日・同『ヘボンの手紙』92ペ)

これは、横浜から弟への手紙で、辞典の記述内容が示されている。

日本語をローマ字で書き

同じ意味を漢字で横書きにし

定義——意義と用法を説明するために

日常会話の文かまたは書物から引用し

同義語を書く

また、「終りOwari」まで清書している。

序文 (preface) にある同義語は、この時期に実行されていたのである。

索引「英和の部」(Index) についての記述は、1867年1月25日、上海からの書簡にある。

辞書は目下、一日6ページの割で印刷中です。誤植の多い校正刷りの訂正をするほかに、最初計画していなかった「英和」の第二編を書き上げなければならないのです。第一編「和英の部」の約250ページ分が印刷出版されました。「和英」の第一編は大体600ページで、第二編「英和の部」は多分、250か300ページになります。6月1日までに全部を完成したい希望です。

(1867年1月25日・高谷道男編訳『ヘボン書簡集』岩波書店178ペ)

こうして、上海で書かれたIndex「英和の部」を含めて、『和英語林集成』は完成した。その喜びをヘボンは次のように記している。

数日前、上海を去る直前、君からたいへんよい手紙を受け取りました。が、それをどこかにおいてしまったので、日付を忘れました。わたしはついにわが家に帰りました。辞書を完成しました。お察しのとおり、自分の家に帰って来て本当にうれしく思っています。

ミッション本部の図書館のためにドクター・ハッパーに託して拙著の辞書一部を本国に送り届けます。もし君がニューヨークにおられたら、それを見られるでしょう。ランドルフに手紙を送ってアメリカ合衆国におけるわたしの代理店となってくれるようお願いしました。右の辞書を多数、同氏に送る予定ですから、その一冊を君に贈呈するよう命じておきましょう。どうかそれをわたしからの寄贈として受けとって下さい。それを一読されたからといって賢くなるわけでもないでしょうが。わたしが天の父によって選び出され、こういう著作を完成した最初の著者として名誉が与えられたことを君は喜んでくれると信じています。

(1867年5月25日・高谷道男編訳『ヘボンの手紙』有隣堂94ペ)

また、続けて、どんなに本書の出版が歓迎されたかを、誇らしげに横浜から弟へ報告している。

当地のあらゆる階層の人々から、わたしの辞書がどんなに所望されているかを君にわからせることはとてもできません。外国人はむろんのこと、むしろ日本人からとくに所望されたのです。わたしがこの地に上陸した時から、人々はわたしの所にきて、辞書を求めたのです。今朝、一人の日本の役人が、遠い国に住んでいる大名のために30冊を買いにきました。日本人は少しも苦労せずに辞書を用いることができるのです。少しの時間で、わたしどものアルファベットをひろい読みできるからです。

(同上・96ペ)



4. 「英和の部」の構成とローマ字表記

初版の索引「英和の部」は、英語見出しにその訳語（日本語）をローマ字表記で示した簡単なもので、単語又は語句の形がほとんどである。「和英の部」にみられるような解説や説明はみられない。

見出し語として示されている英単語の語数は総語数10,030語で、その内訳は次の通りである。

A	489語	F	520語	K	45語	P	869語	U	334語
B	426語	G	307語	L	374語	Q	49語	V	198語
C	782語	H	370語	M	464語	R	575語	W	344語
D	514語	I	551語	N	178語	S	1,292語	Y	24語
E	378語	J	68語	O	275語	T	601語	Z	3語
合計 10,030語									

また、ローマ字綴りは、A TABLE OF THE JAPANESE KANA.(いろは)及び、INTRODUCTION. に示されている五十音図である。次ページ参照。

(1) A TABLE OF THE JAPANESE KANA. (いろは)

	i	ro	ha	ba	pa	ni	ho	bo	po	he	be	pe	to	do	chi	ji	ri	na
1	イ	ロ	ハ	バ	パ	ニ	ホ	ボ	ポ	ヘ	ベ	ペ	ト	ド	チ	ヂ	リ	ヌ
2	い	ろ	は	ば	ぱ	に	ほ	ぼ	ぽ	へ	べ	ぺ	と	ど	ち	ぢ	り	ぬ
3	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ	っ
4	伊呂波	呂波	波	婆	爾	保	菩	閉	辨	登	孺	智	地	利	奴			
5	勝路葉羽				丹	穂	帆	經	邊	砥	度	千	道	里	沼			
	ru	ro	wa	ka	ga	yo	ta	da	re	so	zo	tsu	da	ne	na	ra	mu	u
1	ル	ヲ	ワ	カ	ガ	ヨ	タ	ダ	レ	ソ	ゾ	ツ	ヅ	ネ	ナ	ラ	ム	ウ
2	る	を	わ	か	が	よ	た	だ	れ	そ	ぞ	つ	づ	ね	な	ら	む	う
3	ろ	を	わ	か	が	よ	た	だ	れ	そ	ぞ	つ	づ	ね	な	ら	む	う
4	留	衰	和	加	鶯	與	多	陀	禮	曾	叙	都	頭	禰	奈	羅	無	宇
5	流	尾	輪	香	鹿	代	田	駄	連	十	存	津	圖	根	名	樂	六	卯
	i	no	o	ku	gu	ya	ma	ke	ge	fu	bu	pu	ko	go	yo	te	de	o
1	井	ノ	オ	ク	グ	ヤ	マ	ケ	ゲ	フ	ブ	プ	コ	ゴ	ヨ	テ	デ	ア
2	お	の	お	く	ぐ	や	ま	け	げ	ふ	ぶ	ぷ	こ	ご	よ	て	で	あ
3	お	の	お	く	ぐ	や	ま	け	げ	ふ	ぶ	ぷ	こ	ご	よ	て	で	あ
4	爲	濃	於	苦	具	耶	麻	計	解	不	步		古	吳	衣	低	泥	阿
5	爲	濃	於	苦	具	耶	麻	計	解	不	步		古	吳	衣	低	泥	阿
	su	zo	ki	gi	yu	me	mi	shi	ji	yo	hi	bi	mo	so	zo	su	de	n
1	サ	ゾ	キ	ギ	ユ	メ	ミ	シ	ジ	ヨ	ヒ	ビ	モ	ソ	ゾ	ス	ン	
2	さ	ぞ	き	ぎ	ゆ	め	み	し	じ	よ	ひ	び	も	そ	ぞ	す	ん	
3	さ	ぞ	き	ぎ	ゆ	め	み	し	じ	よ	ひ	び	も	そ	ぞ	す	ん	
4	佐	邪	紀	義	由	米	美	師	慈	惠	飛	母	世	是	須	受	牟	
5	狹	坐	木	杵	湯	女	三	石	次	穢	火	備	裳	瀨	背	頰	巢	將

## (2) INTRODUCTION. (五十音図)

aア kaカ saサ taタ naナ haハ maマ yaヤ raラ waワ gaガ zaザ daダ baバ paパ  
 iイ kiキ shiシ chiチ niニ hiヒ miミ iイ riリ i井 giギ jiジ jiヂ biビ piピ  
 uウ kuク szス tszツ nuヌ fuフ muム yuユ ruル uウ guグ dzヅ dzヅ buフ puフ  
 eエ keケ seセ teテ neネ heヘ meメ yeエ reレ yeエ geゲ zeゼ deデ beベ peペ  
 oオ koコ soソ toト noノ hoホ moモ yoヨ roロ woワ goゴ zoゾ doド boボ poポ

ただし、現実の表記は、印刷の悪条件から不統一である。しかし、その不揃いの中に、幕末明治初期の発音の実態が反映しており、これからの研究に、本書『和英語林集成 初版 訳語総索引』が大きな力を発揮するであろう。

## 解説 2

## II. 『和英語林集成』初版「英和の部」の訳語について

菊地 悟

## 1 「英和の部」の訳語の性格

本書でいう「訳語」は、欧米から入ってきた事物・概念を日本語で言い表わすための新造語に限らず、西洋語に対応するすべての日本語、すなわち英和辞書の場合、英語の訳として使われた単語もしくは句のすべてを指す。

現代の英和辞書においては、英語が特に新しい語である場合を除いて、どの辞書も同じような訳語を採用している。それは、明治以降、さまざまな辞書が登場する中で、その原語に対する訳語の取捨選択が重ねられ、一つの語形に定着してきたことによる。一つの訳語の定着のかけには、多くの訳語の消長の歴史が隠されているのであるが、その歴史とは、辞書編集者が先行する辞書の訳語をいかに選び、また改良して、取り入れていったかの歴史にほかならない。

ところが、幕末から明治期初頭にかけての英学勃興期の辞書編集者たちの場合には、頼りとするべき先行の辞書自体が存在せず、万を超える数の英語一つ一つに訳語をあてていくという作業を、無から始めなくてはならなかった。

森岡健二氏は、幕末期に相次いで発行された二つの英和辞典、『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編、文久2年）と『和英語林集成』初版の「英和の部」とを比較して、「ともに新しい訳語を造語していない点で共通しているが、その翻訳の態度は著しく異なっている」ことを、下表の例で示している。<sup>(1)</sup>

	袖 珍	ヘ ボ ン
citizen	素姓正シキ都府ノ人、府中ノ住民	ヒト、チョウニン、ニンベツ
bank	金銀ヲ預リ替セヲ取組ム座	カネカシ
balcony	窓ノ前ノ張り出シ	エン、エンガワ、カイロウ

森岡氏は、『袖珍辞書』の翻訳法は「英語を新しい概念として捉え、旧来の日本語を用いて注釈する」のに対し、初版「英和の部」の翻訳法は「英語を日本語の新しい概念とは捉えないで、英語に対応する日本語、つまり英語の概念に近似する、もしくは類似する日本語は何かを求めようとする」という違いを指摘している<sup>(2)</sup>。いいかえれば、前者は「注釈法」、後者は「置き換え法」を採用している。

このような違いは、それぞれの辞書自体の性格の違いから派生しているようである。『袖珍辞書』